



「日本は、乳幼児の低死亡率や寿命の長さは世界的にみて最先端なのに、途上国で活躍している医療関係者は少ない。そういった人たちを養成するのが私の役目だと思う」

東京大学医学部に、戦後初めて外国教授として辞令を受け、三日、初出勤した。今後二年間、国際地域保健学教室で指導にあたる。

タイ・バンコクから北へ三百キロ離れた小さな町で生まれ育った。近くに病院はなく、病気になるっても診療を受けられない人がたくさんいた。医

者になりたかった。高校卒業後、国費留学生として東大医学部へ。二十五歳で卒業後、救急医療や外科の現場を踏んだ。熱帯病の臨床研究もした。日本語は達者だ。

「夏休みを利用して帰るタイは当時、無医村がほとんどで、国民の八割が近代医療を受けられなかった。自分が研究してきた医学と、かけ離れた現実があった」

医療サービスのあり方を学ぶため、米ハーバード大へも一年間留学した。東大大学院に戻り、公衆衛生や保健学な

ども学んだ。しかし、そこでも統計や疫学といった理論が中心だった。

「結局、小さな村の人たちの医療や健康状態をよくするにはどうしたらいいか、分からないままタイに帰った」

帰国後、タイ国立マヒドン大学の研究所で、高度医療ではない地域の保健活動の普及に努めた。住民健康ボランティア制度を作り、医療の知識がない多くの住民に、出血熱の治療法や毒ヘビの対処法、栄養管理などを教える。指導者も養成した。今では所長だが、請われて休職し、来日した。

「途上国の医療現場で活躍するには、その国の社会や文化、政治を理解した人が必要だ。保健学教室では、最も大切な現場を必ず経験してもらおうつもりだ。その橋渡しは十分にできると思う」

文・写真 桑山 朗人